

民衆を愛し民衆を信じるたたかい

チュチュ思想国際研究所事務局長
尾上 健一

尊敬するチュチュ思想国際研究所理事長 ラモン・ヒメネス・ロペス先生

尊敬する朝鮮社会科学者協会副委員長 リジェスン先生

尊敬するラテンアメリカチュチュ思想研究所理事の諸先生

尊敬するメキシコの同志と友人のみなさん

私は再び、このように皆さんとお会いできたことを心より嬉しく思います。

1. 反帝自主勢力の時代

現在、世界においては反帝自主勢力が影響力を拡大し、米欧を中心とする従来の世界秩序を大きく揺るがしています。

米欧帝国主義が攻撃を集中している朝鮮、中国、ロシアなど反米・反帝を貫く諸国は、政治・経済・軍事面で著しく強化され、互いの協力関係を一層強化し、帝国主義の侵略策動を粉砕しています。

2024年6月、朝鮮民主主義人民共和国とロシア連邦は「朝ロ包括的戦略パートナーシップ条約」を締結しました。パートナーシップ条約は、朝ロ両国が、世界の安定と平等な新国際秩序の確立を目指し、戦略的・戦術的協力を強化するものです。

また、グローバルサウス諸国は長く続いた帝国主義支配から脱却し、地域および自国の利益を基本にした南南協力を拡大することによって自主、自立の道を進んでいます。

さらに国連のロシア制裁決議に反対するなど、米欧諸国とは明確に政治的一線を画すようになっています。

反帝自主勢力は、人口規模だけでなく、ブリックスに象徴されるように経済規模の面でも米欧帝国主義を凌駕しており、世界における影響力を拡大しています。

反帝自主勢力が強化されることによって、米帝国主義は歴史的危機に直面しています。

2025年に入り、弱体化した米国は他国に犠牲を強いる「アメリカ国主義」を振りかざし、自国と世界を深刻な混乱へと陥れるようになりました。

また、米国は戦争によって利益を得ようとする勢力を助長し、ウクライナやイスラエルへの停戦実現の可能性を遠ざけています。さらに、核戦争による第三次世界大戦を想定した軍事演習を世界各地で実施するなど戦争策動に狂奔しています。

米国の利己的な対外政策は、これまで対米従属政策を続けてきた国々を含め、世界の米国離れを促しています。各国は米国に代わる第三国との交易にシフトし、ヨーロッパでは、米国の要求にたいする対応の違いによって NATO が分裂状態に陥っています。

私たちはいま、自主性を国と民族の生命であるとして反米反帝闘争に勝利し自主時代を牽引した朝鮮の正当性と威力を改めて目の当たりにしています。

現時代はまさに自主の時代であり、自主性こそが自国と世界の平和と発展にとって最も重要な価値であること、反対に他国への依存や従属は亡国と戦争への道であることをはっきりと示しています。

2. チュチェ思想は新しい時代の社会主義思想

人類は、平和で仲睦まじく暮らす社会主義を実現するための思想を長いあいだ求めてきました。

革命思想は時代と民衆の要請に応じて誕生し、深化・発展して社会の歴史的進歩を導いてきたといえます。

マルクスは 19 世紀のドイツで活動し、それまで民衆を束縛していた宗教的世界観を打ちやぶり、社会主義を科学的に解明しました。マルクスの理論により、資本主義の崩壊と社会主義の勝利は歴史的必然であることが立証され、社会主義は科学的体系としての地位を確立しました。さらに、革命の担い手である民衆や闘争方法と結びついたことで、マルクス主義は現実性を帯びたものとなりました。

しかしマルクスの思想理論は、当時の歴史的制約から、物質的・経済的要因を革命闘争の基本と見なし、革命の主体である人間の役割や思想・意識の重要性を十分に提起することができませんでした。

レーニンはマルクス主義を実践し、世界で初めての社会主義国家としてソ連を築き上げました。ソ連社会主義は、自主性を志向する世界人民に大きな希望をいだかせ、多くの社会主義国や政党の誕生を促しました。

しかし、1991 年にソ連は崩壊し、70 年余りにわたる社会主義の歴史に終止符が打たれました。

金正日総書記はソ連崩壊の原因を、「資本主義への幻想と物質至上主義・経済万能主義を掲げた内部の日和見主義にある」と分析されました。(1994 年『社会主義は科学である』)

社会主義を新たな科学的基盤の上に引き上げたのが、金日成主席によるチュチェ思想の創始であり、それにもとづく独創的な理論展開でした。

金日成主席は「人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定する」という哲学的原理を解明し、社会的運動を「主体の運動」として捉え、その法則性を明らかにされました。こ

れにより、社会主義思想は新たな科学的体系として確立されるようになりました。

また、金日成主席は「以民为天(人民を天とみなす)」を座右の銘とされ、生涯を人民の幸福のために尽くされました。

金日成主席の革命活動は、従来の模倣や踏襲ではなく、まったく新しく独創的な路線として推進されました。

1920年代、主席は「打倒帝国主義同盟(トゥドウ)」を結成し、闘いの最終目標として朝鮮における社会主義・共産主義の建設を明確に掲げられました。

当時、朝鮮は日本帝国主義の植民地支配下にあり、人民は民族の文字や言葉まで奪われていました。金日成主席は踏みにじられた祖国で奴隷に落とし込まれた人民の中に入り、その力を信じ励まし人民を団結させ、祖国の解放を実現しました。

金日成主席は祖国解放後も人民とともに、米帝国主義とその追従国による侵略戦争を戦い勝利へと導きました。朝鮮戦争の勝利は、ベトナムをはじめ各国人民の反米反帝闘争に影響を与え、米国が下り坂を歩む契機となりました。

金日成主席は戦争によって焦土と化した状況のもと、農業・工業を含む戦後復興を力強く推し進め、社会主義朝鮮を年ごとに発展させ、「社会主義の模範の国、チョンリマ朝鮮」の名を世界に知らしめました。

金日成主席の偉業について、またチュチェ思想について、社会主義を目指す世界人民は大きな関心をもっていました。その思想理論体系を手にするには金正日総書記の活動を待たなければなりませんでした。

金正日総書記は、膨大な研究と思索の末に、金日成主席の思想がチュチェの思想・理論・方法を統一的に体系化した金日成主義であると明らかにされました。それにより、世界人民は新しい時代の社会主義思想「金日成主義」を旗印として闘争を進めることができるようになったのです。

金正恩総書記の時代に入り、金正恩総書記は金日成主席と金正日総書記の思想を「金日成・金正日主義」として定式化されました。

さらに、「金日成・金正日主義」の本質は「民衆第一主義」であり、その核心は「為民献身」であると明らかにされました。

「金日成・金正日主義＝為民献身」という教義は、誰にでも理解しやすく、実践へと向かう力強い支えとなっています。

いま朝鮮では、為民献身の思想がすべての人民の精神となり、志向となって、社会主義強国建設がかつてないスピードで推し進められ、人民の幸せな笑顔が都市に、農村に、漁村にと、全土に大きく広がっています。

3. 青年と知識人が革命闘争において先駆的役割を果たす

金日成主席、金正日総書記は、ともに青年期に革命の道に進まれ、生涯を人民の幸福と解放のために捧げられました。

金日成主席は 1926 年、14 歳のときに打倒帝国主義同盟を結成し、綱領に朝鮮の解放と独立、さらには世界的な共産主義建設を掲げました。

1930 年 7 月、18 歳の金日成主席は朝鮮労働党の前身となる建設同志社を創立し、のちの党の基礎を築かれました。

金正日総書記は、22 歳で党中央委員会での活動を開始し、青年同盟を党と領袖に忠実な組織へと発展させました。また、帝国主義の圧迫や自然災害など、幾多の国難を乗り越える中で、「先軍政治」を打ち立てて帝国主義から朝鮮を確固と守り抜きました。

金正恩総書記は金正日総書記の急逝後、20 代という若さで国家の最高指導者となり、朝鮮を思想・政治・軍事の強国へと導いています。

金正恩総書記は、為民献身の政治を通して、人民の中に主体的自覚と熱意を呼び起こし、団結した人民の力と最強の国防力を備えて社会主義建設を大胆に、迅速に推進しています。

朝鮮の指導者は、青年たちを革命の先駆者と位置づけ、深い愛と信頼を寄せてこられました。それは朝鮮国内に限られるものではありません。

チュチェ思想国際研究所の誕生とその発展の歩みには、金日成主席による知識人と青年に対する愛と信頼が脈々と流れています。

1976 年 9 月、マダガスカルで開催されたチュチェ思想国際セミナーにおいて、チュチェ思想に関する国際的常設機構の設立案件が提起され、最終的に 1978 年 4 月 9 日、東京にチュチェ思想国際研究所が設立されました。

マダガスカル・セミナーの前年、1975 年には大学教授と私が金日成主席に接見する機会をいただきました。

その際、教授が「私はチュチェ思想の研究普及に十分取り組めておらず、お目にかかるのも恐縮です」と述べたところ、金日成主席は、「私もチュチェ思想の研究は始めたばかりです。今後チュチェ思想は世界で必要とされるでしょう。共に力を合わせて活動していきましょう」と温かく励ましてくださいました。さらに金日成主席は、「青年たちがいるのですから大丈夫です」と力づけてくださいました。

その後、チュチェ思想国際研究所初代理事長となった安井郁教授も、夫人とともに朝鮮を訪問されました。

当時、安井郁教授はがんの治療のため、日朝社会科学者連帯委員会の委員長を辞任し、病床生活に入る直前の時期でした。

しかし金日成主席は、安井教授に対し、「今まさにチュチェ思想の時代であり、理事長が必要です。先生にお願いできないでしょうか」とお声がけになりました。

その夜、安井教授は一睡もされず、主席からの提案について真剣に考えられたといえます。

翌朝、安井教授は私を呼び、「永劫の断片」という自作の短歌集の扉に、「一生かけて 抱きつづけし この夢を わが若きらに 託し目守らむ」という短歌を自筆で記し、私に託されました。

この短歌には、重病の身でありながらチュチェ思想国際研究所創立、そして初代理事長の責務を引き受けようとした安井郁教授の決意が凝縮されています。

安井教授は亡くなる直前まで、創立準備の指揮を執られました。研究所の事務所は当初、東京の一等地にあるビルの一室を借りて運営されていました。

オーナーからは「チュチェ思想とは何ですか？ 貸しても大丈夫ですか？」と問われましたが、安井教授は「これは未来を切り拓く運動です」と説明し、信頼を得て無事に開設することができました。

1980 年、安井郁教授は惜しくも逝去されました。

同年、私たちはチュチェ思想国際研究所代表団として朝鮮を訪問し、10 月 17 日に金日成主席の接見を受けました。

接見の内容は『金日成全集』第 72 巻に全文掲載され、今年 4 月に外国文出版社より多言語で発表されました。

主席の談話は 45 年前のものですが、現代にも通じる重要な内容であり、私たちの未来を照らす道しるべとして深い意義を持っています。

主席は其中で、国家建設の指針としてチュチェ思想を掲げることの重要性を説かれました。

また、発展途上国には「民族幹部の不足」と「米欧の模倣による独自性の欠如」という課題があると指摘され、とくに独立後の国家は、まず農業を発展させ、国民が食べていける基盤づくりを最優先すべきであると教えられました。

主席はさらに、知識人と青年を信じてチュチェ思想を研究・普及し、朝鮮の経験も紹介すべきだと強調されました。主席は「外国に頼るのではなく、自国の知識人と青年を信じ、その自主性と創造性を最大限に発揮させることが重要である」と懇切に教えてくださいました。

今回のように多くの青年が結集するセミナーは、まさに金日成主席の信頼と期待に応える場であると思います。

われわれは、金日成主席の教えと安井郁先生の遺志を継いで世界にチュチェ思想を研究・普及し、自国と世界の自主化を進めるために全力で奮闘しなければなりません。

おわりに

世界のチュチェ思想研究者たちは、常に領袖からの信頼と愛情の中で活動が続けてきました。

それで、私たちは毎年、金日成主席や金正日総書記、金正恩総書記の生誕日に際し、多くの人々とともにチュチェ思想研究セミナーを開催しています。

今年も、日本において金日成主席生誕 113 周年の節目を迎え、4 月に群馬と大阪で日本全国から 200 名が参加するチュチェ思想全国セミナーを意義深く開催しました。

チュチェ思想は、新しい時代の革命思想であり、どの国・どの地域にも適用できる普遍的な価値を持っています。

世界人民がチュチェ思想に立脚することによってこそ、自主的な国家建設と社会主義の発展を現実のものとすることができます。

その最前線には、青年と知識人の役割が不可欠であり、彼らが先頭に立つことで、革命闘争は一層力強く推進されていきます。

また、世界を自主化する闘いは、一世代だけで終わるものではなく、世代を超えて継承されるべき課題です。

ラテンアメリカにおいても、ラモン・ヒメネス・ロペス先生を中心に、若い活動家たちをはじめとした幅広い層が団結し、その主体的な力を強めています。

今後とも、メキシコをはじめとするラテンアメリカ全域において、チュチェ思想の研究と普及がいつそう力強く展開されていくことを、心より願ってやみません。